

令和7年度 文京区障害者地域自立支援協議会

第2回相談・地域生活支援専門部会

日時 令和7年9月18日（木）午後2時00分から午後3時49分まで

場所 文京シビックセンター3階 障害者会館A・B会議室

<会議次第>

1 開会

2 議題

(1) 支援を円滑に引き継いでいく方法について

(2) 暮らしをサポートする仕組みについて（グループワーク形式）

3 総括

4 事務連絡 次回日程等

<障害者地域自立支援協議会委員（名簿順）>

出席者

樋口 勝 部会長、志村 健一 副会長、阿部 智子 副部会長、夏堀 龍暢 委員、辻廣 直己 委員、
松尾 裕子 委員、荒井 早紀 委員、福田 洋司 委員、上村 紗月 委員、中谷 伸夫 委員、
清水 健太 委員、三輪 加子 委員、大橋 久 委員、柳瀬 裕貴 委員

欠席者

関根 義雄 委員、加藤 たか子 委員、安部 優 委員、須田 浩史 委員、齋藤 みさ 委員

<事務局>

出席者

障害者基幹相談支援センター、障害福祉課障害福祉係

<ゲストスピーカー>

1名

<傍聴者>

1名

1 開会

- ・開会挨拶

文京区障害者地域自立支援協議会 副会長 志村健一氏より

2 議題

(1) 支援を円滑に引き継いでいく方法について

資料第1号に沿って、ワーキンググループ参加委員より進捗状況の説明。

- ・引継ぎチェックシートに関する研修会・勉強会の計画が進行中で、
文の京ケアマネ会（2月18日開催予定）、駒込地区障害福祉勉強会、訪問看護ステーション連絡会、指定特定相談支援事業所連絡会の4つでの実施を検討している。なお、地域生活支援拠点でも、5080、6090の世帯と関わることが多く、さらには60歳を迎えケアマネジャーに引き継ぐケースも増えている。

- ・障害分野から高齢分野へのスムーズな移行は、前々から課題だと思っていた。その課題に対して、作成物ができたことはありがたいと思う。まずはこのシートを使って介護保険へスムーズに移行してもらうこと、また皆さんに活用してもらうことでよりよいものになるといい。

- ・スムーズな移行ということで、やはり本人の不利益にならないことが一番重要である。そのためには支援者が、制度をどのように理解していくか考える必要がある。現在検討している勉強会の場を通して、色々な参加者がいる場でどのような視点で説明を行うかを検討したい。

- ・今回このチェックシートは支援者用ということで作成してきたが、所管課での校正の段階で、当事者や保護者の方が目にした際にはわからないだろうといった意見をいただいた。わかりやすい内容での作成に努めてきたつもりではあるが、周知をしていく中で、今後本人、保護者用の作成はどうするかという課題もある。

- ・障害福祉サービスの計画を立てる際に、保健師との連携することも多いので、ぜひ保健師にもこのチェックシートの存在を知っていただきたい。今後はこのシートを活用し、スムーズな移行を進めていきたいと考えている。

(2) 暮らしをサポートする仕組みについて（グループワーク形式）

部会長より、前回の事例検討について資料第2号に沿って振り返り。

今回の検討事例について、ゲストスピーカーより説明。

基本事項：・30代女性 身体障害（身体手帳1種1級 脳性麻痺）

- ・母と兄との3人暮らし。
- ・特別支援学校高等部卒業後、生活訓練を1年6ヶ月利用。その後、実家に戻り現在の生活介護事業所に通所。
- ・就労希望があるも条件が合わず断念している。

本人の希望：・一人暮らしの希望はあるが精神的な余裕がない。

- ・以前は、恋愛への憧れもあったが、現在は生活で精いっぱい。
- ・将来的にはグループホーム等での集団生活ではなく、一人暮らしを希望。
- ・まずは居宅介護を利用して家庭内での自立を目指し、一人暮らしにつなげていきたい。
- ・移動支援を利用し、外食や好きなアーティストの推し活をしたい。
- ・ヘルパーには介助者的ではなく、友人のように接してもらいたい。

検討課題：事例を踏まえ、追加で必要な支援やネットワーク構築方法、地域の不足資源・支援について検討する

（グループワーク）

○各グループの検討内容

1グループ

- ・好きなアーティストの推し活を単独でなく、オフ会へ参加することで友達作りを支援する。
- ・オフ会の参加者など共通の趣味を持つ人にガイドヘルパー研修を受けてもらい、支援の輪を広げることで、ヘルパーには支援者的ではなく友人として接してもらいたいという本人のニーズを叶えられるとよい。
- ・本人の世代と近い区内大学の学生ボランティアとの交流。
- ・実際に一人暮らしをしている当事者の先輩の家を見学するツアーを企画する。同世代の一人暮らし体験を見ることでエンパワメントされ、諦めていた仕事や恋愛などへの意欲につながる可能性がある。
- ・本人家族双方の生活を安定させられるよう、家族全体の支援を検討する。

- ・車椅子ユーザーでも利用可能なショートステイなど、身体障害者向けの一人暮らし体験ができる場所、社会資源の不足がある。

2グループ

- ・「推し活」や友人との外出、友達作りの場へ行くために移動支援が必要であるが、ヘルパー不足・人材不足という地域課題がある。

- ・パーソナルアシスタント制度を利用することで限定されたニーズだけでなく、複合的なニーズにも対応できるのではないか。

- ・大学が多い地域特性を活かし、学生ボランティアを活用する。大学へヘルパー講習会を案内しても反応がうすい。直接、ボランティアサークルへのアプローチが効果的である。

- ・育児等で一時離職中の元ヘルパー、学生の空き時間を活用して、ヘルパーに異なる業種を手伝いいただくなど、様々な人の隙間時間を活用して多面的に福祉に関わっていただくこと、タイミー等の活用も有効的である。

- ・一人暮らしを実現している先輩の生活を共有する場として、自立生活プログラム（ILプログラム）を利用する提案。

- ・慢性的な移動支援のヘルパー不足があり、継続利用している方が優先され、新規利用が叶わない現状がある。移動支援の効果的活用法として、自立につながる方を優先的にマッチングし、一定期間集中的に支援することで、その後は自力での移動ができるようになる計画的支援の提案。

3グループ

- ・ネットワーク構築の一つとして、地域からの依頼で名刺やカレンダーを作ったり、デジタルカフェなどを利用したりすることで地域とのつながりを持つ。

- ・本人の推し活を通じた仲間作りを行う。

- ・介護にも支援の輪を広げ、支援者同士の連携が必要。

- ・将来の一人暮らしに向けたバリアフリー住宅の確保。

- ・一人暮らしと就労、どちらを先に進めるかは関係者との協議が必要。

第4グループ

- ・本人の主な心配事でもある家族の支援に誰がどのように入るか検討していくことが必要。

- ・複合的な課題を抱える家族のサポートをコーディネートする人が必要。
- ・家庭の事情や障害がハードルとなり経験する機会が持てず、本人は就労や恋愛など興味があるものの気持ちが遠のいてしまっているのではないか。
- ・将来について相談ができる友人がいるといい。情報を得る場や、友人を作れるようなサポートが必要。
- ・生活を支える公的サービスはあるが、その人らしい自己実現をどうサポートするかが課題。

○各グループの発表を受けて

樋口部会長より

前回部会で志村副会長が総括で指摘された「恋愛」や「友達との生活」の視点がグループワークに反映され、フォーマルなサービスよりもインフォーマルなつながりの構築が活発に議論されて、第1回から発展した新たな視点が得られたと感じる。単にサービスに当てはめるのではなく、自然に繋がれた友人といったインフォーマルな関係の重要性と、支援者の適切な立ち位置が今回の議論の中心的なキーワードとなっていた。

ゲストスピーカーより

本人主体で考えていくことの重要性を再確認した。今回の様々な意見を踏まえ、自己実現につながるサポートを考えながら、支援に当たっていききたい。

(3) その他

・志村副会長より総括

各グループが対象者の身体的ニーズ、仕事、家族関係、移動、余暇活動など多角的な視点からバランスよく検討できていた。現場で直接支援にあたる者、相談支援従事者、社会福祉協議会、地域住民、行政など様々な立場で真剣に議論できることが文京区の強みだと感じた。都外施設では、害獣問題などの地域事情で外出が規制される地域もあり、国連の方針に反することがいまだに行われている。だからこそ、区のレベルで地域課題をみんなで検討することが非常に重要である。

以上